

■金堂跡の調査

金堂跡は、これまでに基壇本体の調査を昭和31年度に日本考古学協会、昭和40年度と平成22年度に市教育委員会が、都合3回にわたって行いました。その他、関連する調査として、平成19年度には金堂前面(南側)で幢竿支柱(幡を掲げる竿)、平成23年に北階段の北側延長線上で石敷・瓦敷の通路状遺構を確認しました。今年度は、平成22年度の調査で追及が及ばなかった南階段の構造と、現在の道路直下に及ぶ基壇及び、基壇外周をめぐる雨落石敷の広がりを確認する目的で調査区を設定しました。

道路上での調査は昨年7月に行い、いずれの調査区でも、残念ながら近世以降の攪乱によって、遺構は遺存していませんでしたが、攪乱土中からは大型礫が出土しており、河原石が基壇の外装や階段の部材として使われたものと思われる。見学会当日は、南階段が想定される部分の調査区で、基壇外周の雨落石敷の延長と、基壇版築の一部をご覧頂くことが出来ます。

これまでの発掘調査で判明した、僧寺金堂跡の成果の概要は以下のとおりです。

建物規模・構造：桁行7間(約36.1m)×梁行4間(約16.6m)、四面廂建物

基壇規模・構造：東西約45.4m、南北約26.2m、乱石積基壇外装(発掘調査では、3段まで積上る状況が確認されています)

基壇高は推定約0.8~1.25m(雨落石敷上面からの推定高で、西側に比べて相対的に東側の方が高い)

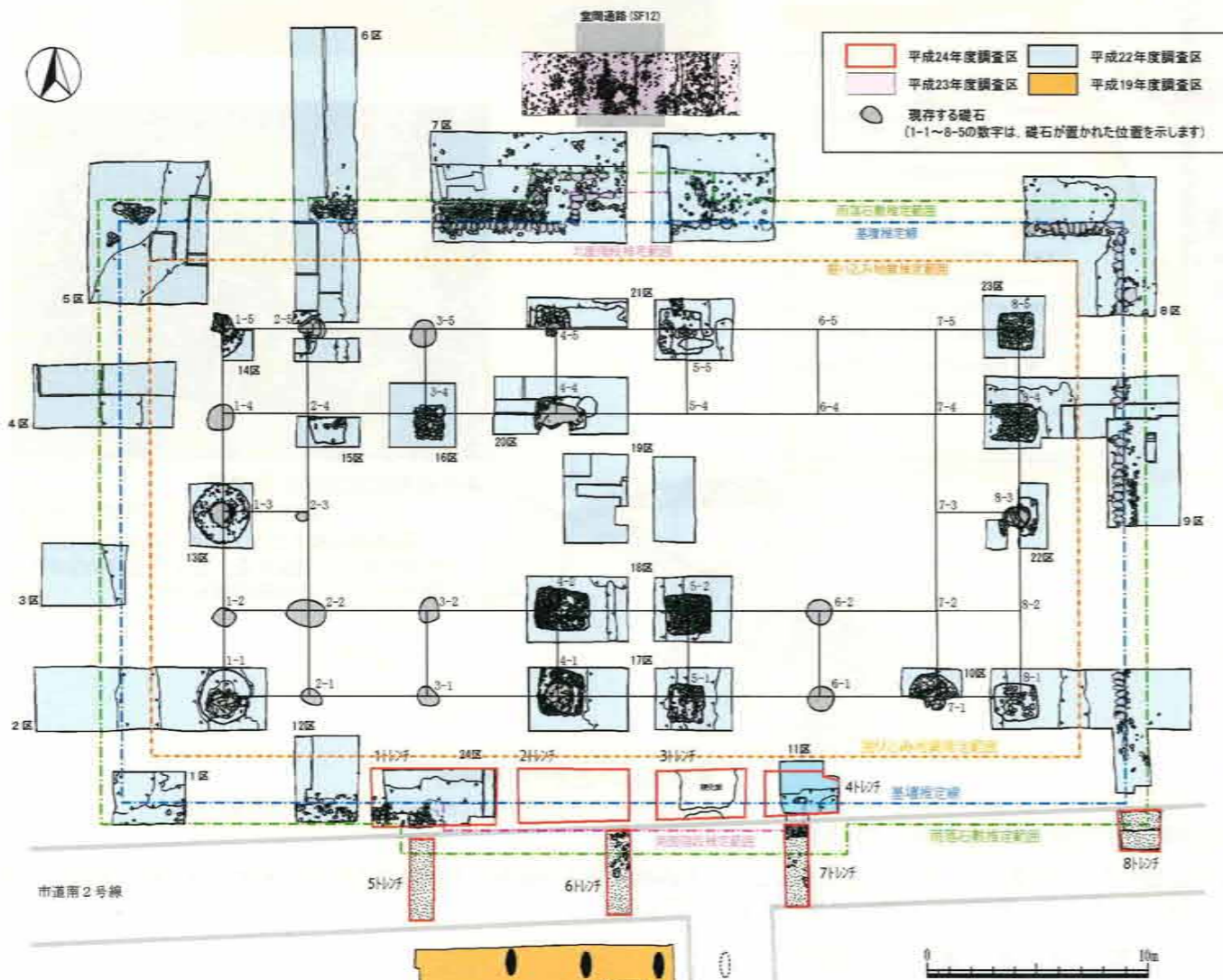
階段(北面)規模：幅推定約4.5m(建物中央間1間分)、出幅は約1.35m。河原石を部材し、蹴上げ高約0.2m、踏面幅約0.3m、段数は推定3段であったと想定されます(基壇上面が4段目に相当します)

階段(南面)規模：幅推定約16.5m(建物中央間3間分)、出幅は1m以上(階段南端は不明)。

雨落施設(雨落石敷)規模・構造：大きさ約20cm程度の河原石を敷き、幅は約0.9~1mを測ります。基壇および階段の外側に廻っています。

伽藍中軸線：史跡整備に伴う発掘調査を始める以前は、伽藍中軸線は、現存する礎石の分布状況等を手掛かりとして仮の中軸線を想定していましたが、平成19年度以降の発掘調査によって、金堂建物の中軸線は、この想定中軸線よりも西側に約30~40cm程度ずれることが確認されました。金堂建物中軸線は、北面階段の北側に取りつく堂間通路(外側の見切石間の幅は約4.3mを測ります)、さらに金堂前面(南側)に聳える4本の幢竿支柱、それぞれの中軸線とも重なり、これらの遺構が一体的な設計のもとに作られた可能性が判明しました。

一方で、北側と同様に、南面にも階段幅に合わせて通路が設けられた可能性はありますが、現在までのところ、中門から金堂南面階段までの間で行った発掘調査では、明確な通路状の遺構は確認されていません。



金堂跡周辺調査区全体図

国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡

見学会資料

平成24年度 発掘現場見学会 僧寺金堂跡・中枢部区画施設

平成25年2月16日(土) 午前11時~午後3時

主催：国分寺市教育委員会、国分寺市遺跡調査会

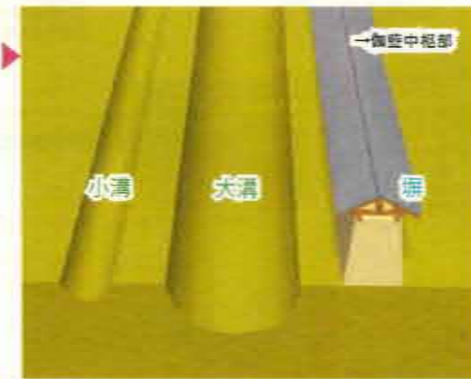
協力：東京都埋蔵文化財センター

国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア

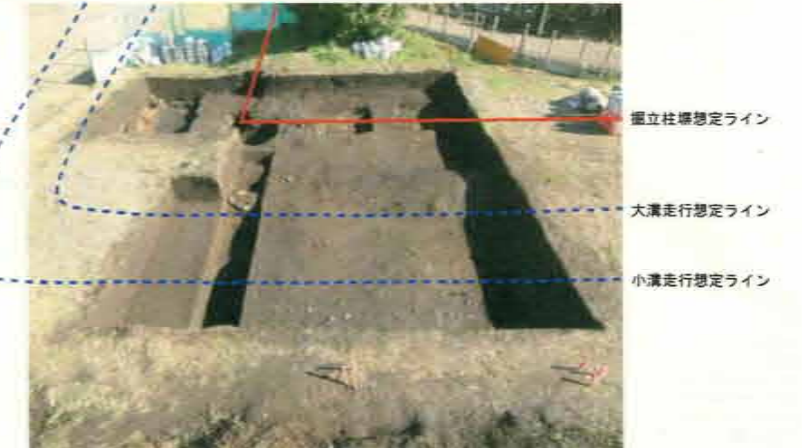
国分寺市では、国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡を歴史公園として整備するため、平成16年度から僧寺伽藍の配置や規模・構造などを究明する事前遺構確認調査(発掘調査)を実施しています。本年度は、金堂跡と中枢部区画施設(中門から両翼に延びて、金堂・講堂など主要な伽藍建物群を囲む塀と溝)を対象に4地点で調査を行いましたところ、これまで不明確だった区画施設の詳細な様相が明らかになりましたので、その成果をご紹介します。

<今年度の主な成果>

- 伽藍中枢部の区画施設は、当初、掘立柱塀が外周を巡っていました。その規模は東西(北辺)が約156m、南北(東辺)が約132mを測ることが判明し、東西に長い長方形の区画を呈していました。また、中枢部区画施設北西地区の調査では、柱穴掘り方の形状や覆土の観察から、最低1回の柱の建て替えが行われたこともわかりました。
- 掘立柱塀は、その後、褐色土・白色粘土等を固く叩き締めながら積み上げて構築した築地塀へと変わりました。築地塀は、平成19年度に調査を行った区画施設南辺部(中門周辺)の発掘調査でも、ほぼ掘立柱塀の軸線上に重なって作られていることが確認されています。
- 金堂跡は、基壇と基壇外周を巡る雨落石敷の一部が、南側現道の直下まで広がることを確認されました。推定される基壇の規模は、東西約45.4m、南北約26.2mを測ります。
- 金堂跡の南階段部分は、後世の攪乱等によって必ずしも遺存状況が良好ではありませんでしたが、周囲に大型扁平礫が散在していたことから、北側の階段と同様に、河原石を多用した構造で、幅は中央間3間分であったことが推定されます。



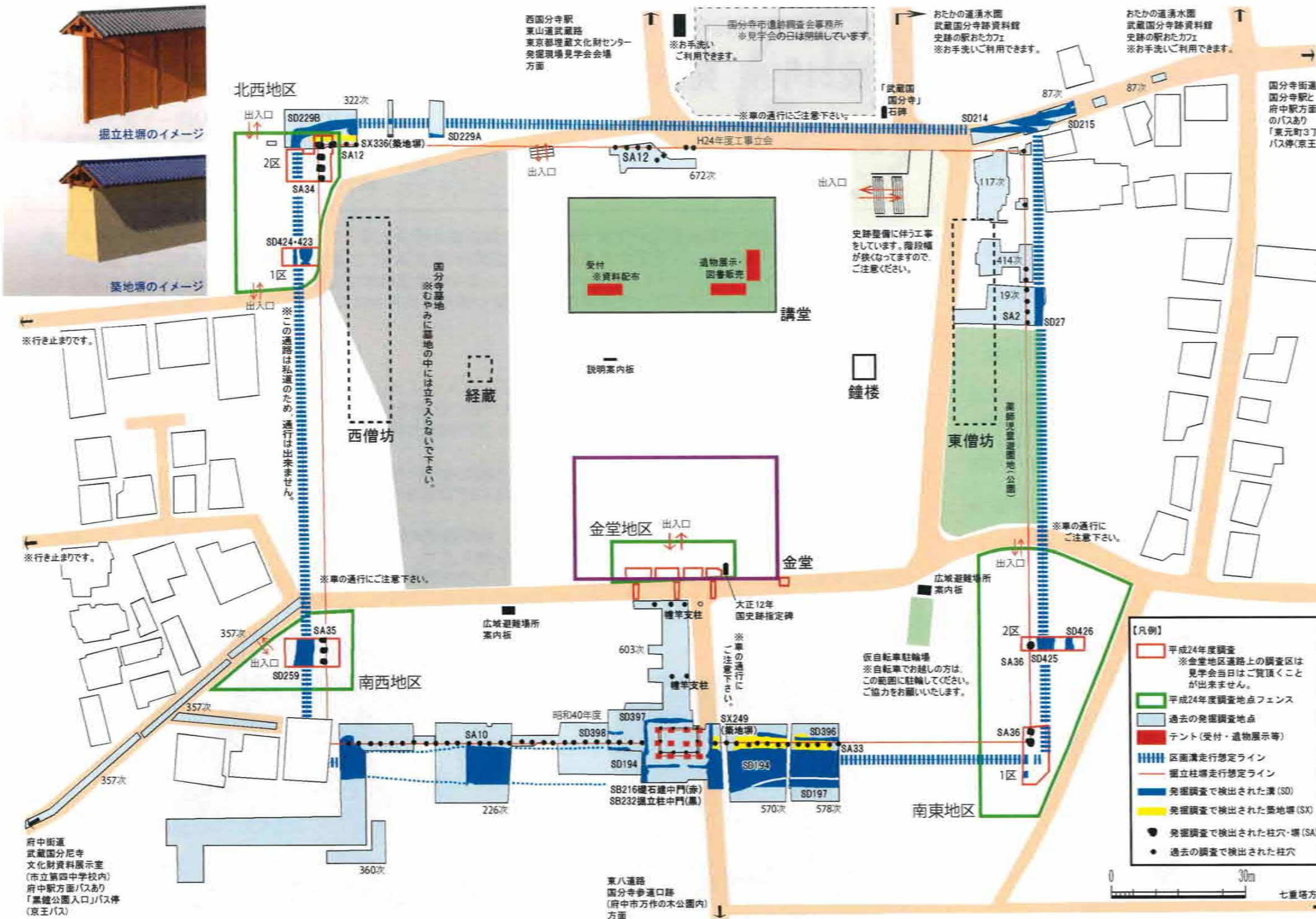
塀と大溝・小溝のイメージ



▲中枢部区画施設北西地区全景(西側から撮影)



▲北西地区掘立柱塀の柱穴検出状況(左:北西隅の柱穴と築地塀の位置関係、右:北西隅柱穴から南へ3つ目の柱穴断割り状況)



中枢部区画施設関連調査区全体図

古来の寺院や官衙の主要施設には、その空間を遮蔽・防御し、外部に対して国の威厳を誇示する機能として、塀や溝等の区画施設を設けることがあります。

塀には、一本柱の掘立柱塀(土壁・板壁)と、土を搗き固めながら積み上げて作る築地塀とがあり、それぞれの壁体の上には屋根を設けます。掘立柱塀は、柱を据える穴(掘り方)に、柱材を直接地中に埋め込むため、年数が経過すると根腐れが起きることから、古い柱材を抜き取って、新たに柱を据え直すことがあります。それに対して築地塀は、版築によって強固な壁体を築くため、一般的に掘立柱塀に比べて耐久性があると考えられています。

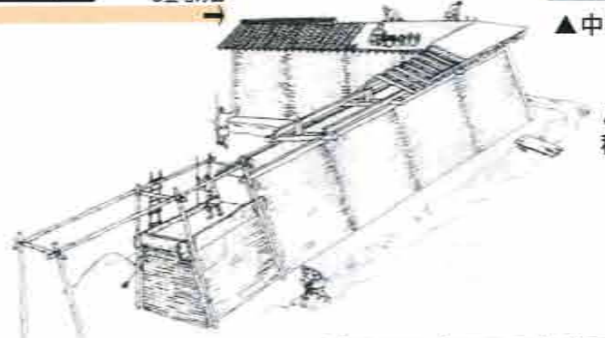
中央の宮殿(都城)や寺院の遺跡では、7世紀代には掘立柱塀が中心でしたが、8世紀以降になると、築地塀を採用することが多くなり、地方の官衙や寺院では、それより遅く8世紀後半から9世紀頃に掘立柱塀から築地塀へ移行する傾向が見られます。



▲武蔵国分尼寺跡 復原掘立柱塀 (尼坊北側)



▲中枢部区画施設北西地区 築地塀基礎部分の断割り状況
 基底部分は黒色土で、その上に粘質の褐色土と白色粘土・砂質土を、固く叩き締めながら積み上げている状況が判ります。



▲築地塀の造営作業想像図
 奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』より

■中枢部区画施設(北西地区)の調査

北西地区の北側隣接地は、平成元年に寺域確認調査の一環で発掘調査が行われています(322次調査)。その時の調査では、東西に並ぶ4基の柱穴(掘立柱塀SA12)と、その北に接して幅約1.5m程の帯状に広がる褐色・白色の粘土層、さらにその北側には区画溝(SD229)が巡ることが明らかになっていました。

今年度の調査区は、平成元年に検出した西側2基の柱穴を再度絡めつつ、南側へ調査区を拡張しました。その結果、南北方向に4基の柱穴列(SA34)と、柱穴列の西側に並行する大小2条の溝(SD423・424)、さらに北側の調査区(2区)では、溝の埋没後に重複する形で大きな掘り込み(SX337~339)が存在することが確認されました。

このうち、発見された全ての柱穴で2時期の重複が確認されています。これはほぼ同じ場所を踏襲しながら、柱の建て替えを行ったことを示しています。掘立柱塀北西隅にあたる柱穴を例に見ると、古い掘り方は1.5×1.3m規模の方形、新しい掘り方は1.1×0.6m規模の楕円形状を呈し、新しい柱穴には柱を抜き取った痕跡が認められます。

また、柱穴の北側に広がる粘土層(SX336)は、今回、初めて断割り調査を行った結果、黒褐色土地山の上に、白色粘土・褐色粘質土等を固く叩き締めて積み上げた状況が判り、築地塀の基底部と考えられます。このような築地塀の痕跡は、中門東側の区画施設南辺部で、掘込地業を伴う、幅3.1mにおよぶ築地塀の基底部(SX249)が確認されています。

塀の外を巡る溝のうち内側の溝(SD423)は、幅が約3mで、溝底面は平坦ではなく、土坑が連続する形状を呈していて、所々に途切れる状況が確認されました。これは、尼寺伽藍中枢部の溝でも共通した様相で、金堂・講堂のみならず、僧坊をも圍繞する目的が何であったのか、今後の検討課題といえます。

■中枢部区画施設(南西地区)の調査

この調査区では、南北に並ぶ柱穴3基(SA35)と、その西側に溝状の掘り込みが確認されています。いずれも平面的な確認に留めていますが、築地塀の痕跡は見発されませんでした。

■中枢部区画施設(南東地区)の調査

過去に行われた区画施設に係る調査区では、掘立柱塀の北西隅・北東隅の柱穴は確認されていましたが、今回の調査によって、新たに南東隅の柱穴を確認することが出来ました。掘立柱塀の外側に大小の溝が並走する状況は、北西地区と同じ様相です。大溝(SD425)の覆土からは、瓦・土器のほか銅滓が出土しています。